

Interview

Interfaculty Initiative in Information Studies and Graduate School of Interdisciplinary Information Studies, The University of Tokyo



園田茂人教授 若者よ、海外に出よう!

昨年度より情報学環に着任された園田先生に、ご自身の研究と大学院の国際化についてお話を伺いました。

園田先生は、アジア情報社会コース(ITASIA)やアジア・グローバルゼーション・スタディズといった、情報学環の国際的な教育研究プログラムに携わっていらっしゃいます。研究を楽しむ姿勢とエネルギーに満ちた園田先生からのメッセージをお届けします。

■ ご専門の中国研究に進んだきっかけを教えてください。

大学に入ったのは1980年でした。大学3年の終わりに、はじめて北京大学から東大の社会学に国費留学生が来た関係で、私の指導教官が中国で集中講義を行うことになったんです。そのとき全く根拠なく「これはおもしろそうだ」と思って、鞆持ちとして初めて中国に行きました。そしたらなんと、盲腸になって死にかけた(笑)。全身麻酔を大きな注射針で脊髄にくぐりぐり入れられました。これが痛い、なんの。意識が朦朧としてきて、まさに修羅場ですよ。でもね、実はそのとき、嫌々ながらも中国の社会学者の卵が病院に見舞いに来てくれて、それから彼らとの距離が近くなった。命張って病院に入ったことで友達がたくさんできたのです(笑)。

中国は複雑で、人間関係や社会の成り立ちを理解することは難しいけれど、それがたまらなく魅力的に思えました。それまで本格的に中国の社会学を勉強する人など、日本にはいませんでした。我々は中国や他のアジア諸国を理解する言葉や彼らと付き合うためのツールを持っているだろうか、西洋理論の輸入ばかりしていても、中国を理解することはできないのではないかと考え、日本の社会学に愕然としました。同時に、「ここには膨大なフロンティアがある」と直観的に思いました。

1980年代から、中国の発展とそれに伴う国内の不平等、格差の拡大などの問題について、当時まだ市民権を得ていなかった「グローバルゼーション」という言葉を使いながら、調査をはじめました。データを積み重ねて模索しているうちに、今に至ったのですが、まさに人間万事塞翁が馬ですね(笑)。

尖閣諸島の件で明らかになってしまいましたが、まだ日本も中国も「お互いを自分たちの延長で理解できる」という変な誤解を持っていると思います。新婚時代には、お互いが相手の行動を理解できないために意見のぶつかり合いが起きるものですが、年をとると距離の取りかたがわかってきますよね。国と国の関係もこれと同じで、これから日中は個別の案件でぶつかったとしても関係を維持できる方法を、学んでいくべき段階にあるように思います。

■ 大学院の国際化にも携わっていらっしゃいますね。

統計を取って、日本の学生と他のアジア諸国の学生を比較してみると、「海外留学への関心の高さ」はそれほど変わりません。決定的に違うのは、「留学後にどうするか」という項目です。日本人学生の

場合、全体の7割5分くらいが「すぐに日本に戻る」と回答します。他のアジアの学生だと、半数以上はしばらく留学先で生活することを望みます。日本に来ている留学生もそうだと思うのですが、日本で就職活動をする人、多国籍企業への就職を目指す人など、留学と就職が密接に結びついている場合が多いです。ですから、外国語や文化を勉強するモチベーションが全然違う。いまや日本国内で募集される国際的な研究プロジェクトであっても、英語能力が高い留学生がコンペに勝ち続ける時代が来つつあります。

今年度から情報学環では、「アジア・グローバルゼーション・スタディズ」という若手研究者を海外に派遣するプログラムを始めました(URL: <http://www.iii.u-tokyo.ac.jp/daikokai/index1.asp>)。日本人学生も、このプログラムを使って、ぜひ国際的な研究活動に参加してほしいと思います。

現在は、個人プロジェクトと共同プロジェクトを並行して募集しています。最初からネイティブと国際学会で議論するのは厳しいかもしれない。けれども、例えば定例化しているソウル大学とのシンポジウムに参加すれば、ノン・ネイティブ同士で「なんだ、あいつもRの発音できてないな」という段階からはじめて、互いに切磋琢磨していくことができます。準備は大変だけど、場数を踏んでおけば気分が楽になりますし、日本国内では受けられなかった刺激を受けることができるはずですよ。

■ 研究にプロジェクトにと大活躍ですが、エネルギーの秘訣は?

私の父は鹿児島県の工業高校を出て、大学も行かず無一文で上京して、工務店を作った男でした。父はもうありあまるくらいのエネルギーを持っていて、「ぶん殴らないと男の子は素直にならねえ」というタイプ(笑)。そんな家で育ち、父も母も大学に行かなかったのも、大学は奢侈品であるという意識が私にもあります。でもだからこそ、同じ研究をやるなら好きなことを最大限に楽しんだ方がよい。基本はそれですね。

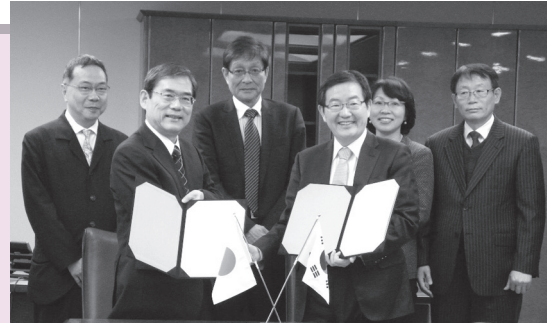
学生諸君にも研究を楽しんでほしいと思います。いつ成果が出るかわからない中で自分に圧力をかけるんだから、成功したら「やった!」ってバカになったり、もっとポジティブに、楽しく研究をやったらい。大学院って本当は一番賢い場所であるはず。創造的なことに自ら取り組めるわけだから、それをぜひ楽しんでほしいですね。

韓国KISTIとの交流協定

韓国科学技術情報研究院 (Korea Institute Science and Technology Information、以下KISTI) と東京大学が、東アジア地域での科学技術情報の流通に関する技術開発において緊密な共同を行う交流協定が締結され、11月22日、Young-Seo Park院長をはじめとする7名の代表団が本学を訪問し、濱田総長・田中副学長・石田学環長らと歓談された後、合意文書の調印式が行われた。

KISTIは、韓国における科学技術研究のためのインフラとなる情報システムの構築に責任を持ち、そのための研究と開発を行う組織である。日本での国立情報学研究所(NII)、科学技術振興機構(JST)に対応し、韓国内の研究者と共同してスーパーコンピュータの利用技術の研究開発とその運用を行うなど、情報技術分野での中核組織の一つとなっている。特に、出版論文数の急激な増大への対処、データ中心の科学技術研究の進展など、膨大なデータや知識を構造化することで研究者に有効な情報を提供する情報技術への関心が高く、今回の交流協定でもこの分野での共同に焦点をあてている。東大からは、この分野で先行的な研究を行う情報学環、情報理工学系研究科、工学系研究科の3つの研究科が対応することで、全学の交流協定となった。

東アジア圏は急速な経済発展とそれを支える科学技術への投



資の増大から、世界における存在感を増しつつある。しかしながら、英語中心の現在の情報流通のためにアジア圏内での共同研究、あるいは、圏内からの世界への情報発信は、同様な状況にあるヨーロッパ圏と比べても、大きく遅れている。韓国においても、国際的な情報摂取は英語中心で米国からの情報の影響が増大する傾向にある。

Park院長は日本(早稲田大学)で博士を取得され日本語も流暢なことから、日本からの情報収集、あるいは、韓国から日本への情報発信の重要性を特に強調されている。外交辞令もあろうが、本学への期待は大きく、中国を含めた東アジア圏での情報流通を高めるイニシアティブを東京大学にとってほしい、KISTIは全力を上げて支援するから、ということであった。(教授・辻井潤一)

日韓シンポジウム開催

10月21日と22日、韓国ソウル大学で日韓交流シンポジウムが開催された。このシンポジウムは、東京大学情報学環・学際情報学府とソウル大学言論情報学科の間で学術交流の一環として毎年行われている。今年度は「New Directions in Journalism and Media Studies」と題して、両校の教員と大勢の学生によって会場が賑わうなかで開催された。学環・学府からは石田英敬学環長をはじめ、吉見俊哉教授、園田茂人教授、林香里教授がそれぞれ研究発表と討論を行った。大学院生は、参加者募集に応え審査を経て選ばれた7人が大航海プログラムの支援を受けて参加した。シンポジウムの前日に開かれた海外学者招聘セミナーでは、石



田学環長が「クリティカル・プラトーン」について発表し、活発な議論が行われた。

本プログラムの教員セッションは、両校の教員と学生から大きな関心を集めた。第1セッションでは、ソウル大学のEun-mee KIM教授がインターネット・リテラシーと家族背景の関係性について、園田教授がアジア地域統合研究に対する社会文化的なアプローチについて発表を行い、ソウル大学のJoong-seek LEE教授とSung Gwan PARK教授が討論を行った。第2セッションでは、林教授が日本のジャーナリストによる移民問題の報道について、ソウル大学のKyu Sup Hahn教授が政治情報に関する国際比較について発表を行い、ソウル大学のSeung-Mock YANG教授と高麗大学のJae Chul SHIM教授が討論を行った。

学生セッションでは14人の院生が研究発表を行い、学府の院生たちは討論に積極的に参加した。発表テーマは、日本の携帯ニュース配信の技術革新からデジタル時代における身体性の捉え方の変容まで、多様であった。

レセプションでは、両校の教員と学生が懇談をし親睦を深めることができた。暖かい家族的な雰囲気にも包まれた参加者たちは、来年度の東京での再会を願い、盛況のうちに散会した。(吉見研D2・南慈英)

Topics

Interfaculty Initiative in Information Studies and Graduate School of Interdisciplinary Information Studies, The University of Tokyo

Tokyo University International Activity Committee organizes “Careers in Research and Academia” Panel for Graduate Students



The Panelists (from left to right): Ms. Setsuko Kamiya, Prof. Jason Karlin, Dr. David McNeill and Prof. Fabian Froese

More than thirty students gathered at Fukutake Hall on the evening of November 19th, 2010 for GSII's first annual career panel for graduate students pursuing future employment in research and academia, an event organized by Tokyo University's International Activity Committee.

The panel, "Careers in Research and Academia," hosted four professionals in the field of journalism and academic research: Ms. Setsuko Kamiya of *The Japan Times*; Dr. David McNeill – the Japan/Korea correspondent for *The Independent* and a lecturer at Sophia University; Professor Fabian Froese – an assistant professor of international business at Korea University Business School; and GSII's own Professor Jason Karlin who specializes in gender and media studies. The four speakers opened the event with an introduction of their current professional activities, career trends in their specific fields, and advice for students on how to approach post-graduate positions in research and academia. The

event concluded with a Q&A session, followed by a reception with panelists, GSII faculty, and students.

The University of Tokyo is currently seeing an increase in international students who come to pursue a degree at Todai from all around the world, especially after the launch of ITASIA in 2008 - the university's first English-only graduate program. While the internationalization of the student body is positive for the University's image and quality of academic pursuits, the reality is that the majority of international students often find themselves trapped between hopes of finding employment in Japan after graduation and a worrying shortage of training and practical knowledge on how to approach positions within the Japanese recruiting system. The annual career panel aims to address these issues by inviting speakers of various backgrounds who have personal experience passing through the system and can offer students an "insiders" view and advice on pursuing careers in Japan and Asia.

The second career information event is tentatively planned to take place in the spring of 2011 and will focus on private sector employment in Japan.

(By ITASIA Student Body Government)

Careers in Research and Academia
Panel, November 19th, 2010.



留学生バス旅行2010

学際情報学府ではほぼ毎年留学生向けにイベントを企画している。今年度は11月13日、富士山へ留学生懇親旅行を実施し、研究生、修士、博士合わせて47名が参加した。週末の渋滞を越え、富士山がお目見えしたときには、一同から歓声が上がった。

河口湖へ着き、ふじやまビールでの昼食を終えた後は、それぞれが紅葉狩りやクラフトパークでのガラス工芸などを楽しんだ。最後に全員で富士五合目を訪れ、堂々とした偉観を背景に写真撮影を行った。帰りの車中では留学生同士が互いに打ち

解け、笑い合う声が溢れており、親睦を深める良い機会になったようだった。(留学生支援室)

富士山五合目にて、美しい雲海を背に参加者全員で記念撮影。 ▶



学環10周年シンポジウム開催

11月12日に、情報学環・学際情報学府創立10周年を記念するイベントが福武ホール全域を使って開催された。第1部では、長尾真国立国会図書館館長、鷺田清一大阪大学総長からの祝辞、また濱田純一総長からは主催者のお一人としての挨拶を頂いた。続いて、「もう10年、そしてこれから」と題された第2部では、情報学環の各コースの先生方がこの10年の歩みを振り返り、第3部では、第1部に登壇頂いた三先生による「学環的なもの未来」をめぐっての討論が繰り広げられた。

シンポジウム後は、福武ホール内コモンズを中心に、パーティーや、在学生によるポスター展示、一期生によるMRを活用したデモンストレーションが行われた。当日は、学環・学府の関係者だけでなく、社会情報研究所ゆかりの方に多数参加頂き、10年にとどまらない学環・学府の来歴を改めて確認することができた。しかし、なにより、シンポジウム第2部のタイトルにある通り、「これから」を考える重要な機会であった。(助教・西兼志)



第4回学環顧問会議開催

11月25日、4回目となる顧問会議が、印刷博物館館長・榊山紘一氏を座長として福武ホール・ラーニングスタジオにて開催された。学環側から、創立10周年を迎えたことや、新たに現代韓国研究センターが設立されたことなどが報告された後、委員の方々から

意見や質問をいただいた。「学環だからできることはなにか」という本質的問いかけも頂戴し、限られた時間の中で濃密な議論が行われた。

東京大学制作展 iii Exhibition12 開催

「東京大学制作展」は、東京大学大学院情報学環・学際情報学府の授業の一環として開催されるメディアアートの展覧会である。東京大学の研究や技術を、メディアアート作品というかたちに落とし込むことで、より多くの方々に実際に触れていただき、より身近に感じていただくことを目的としている。12月2日からの6日間、本郷キャンパス工学部2号館において、今年度2度目の展覧会となる「東京大学第12回制作展」が開催された。今回のコンセプトは「BRIDGE」。東京大学制作展が、研究領域間や、東京大学と社会との間をつなぐ架け橋となることを目指した。

18の出展作品に加え、各作品のコンセプトや技術的背景を説明するポスター展示「IDEA WALL」など、より「伝える」ことを意識した展示となった。会期中は、子どもからお年寄りまで500人を超える方々にお越しいただき、実際に作品に触れながら、東京大学との「BRIDGE」を感じていただいた。(荒川研M1・坂田圭史)



受賞報告

●防災担当大臣表彰
田中淳教授・総合防災情報研究セン

ター長が平成22年防災功労者防災担当大臣表彰を受賞し、9月3日に東京タワーで表彰式が執り行われた。この賞は我が国の防災に携わる者にとって歴史と重みのある賞のひとつである。詳しくは、情報学環総合防災情報研究センターのニュースレターVOL.10(2010年12月1日発行)をご覧ください。(http://cidir.iii.u-tokyo.ac.jp/publication/cidir-newsletter.htm)



●サントリー学芸賞 & 大川出版賞

田中久美子准教授が著書『記号と再帰—記号論の形式・プログラムの必然』(東京大学出版会)によって、サントリー学芸賞(思想・歴史部門)と大川出版賞を受賞した。筆者によると、本書は9年前の情報学環勤務時代に、西垣通教授からアドバイスを受けたことがきっかけで執筆。本著を「文理融合の学際的活動の結果」と位置付けているそう。サントリー学芸賞は12月6日、大川出版賞は3月9日に授賞式が行われる予定。

●日本学術振興会から表彰

園田茂人教授が日本学術振興会(JSPS)から22年度の優秀な科学研究費補助金の審査委員として表彰された。この表彰は科学研究費補助金の審査委員の中から、模範となる審査意見を付した委員に対して贈られるもので、園田教授は審査委員5000名の中から選考された39名の一人としてその荣誉に輝いたものである。

●情報文化学会 学会賞

◎ 研谷紀夫特任助教と添野勉元特任助教(現国立民族学博物館 外来研

究員)が情報文化学会賞を受賞した。本賞は、情報文化の分野における優れた研究活動に授与されるものである。受賞の対象となったのは、情報学環「21世紀COE:次世代ユビキタス情報社会基盤の形成」及び「情報学環社会情報研究資料センター:高度アーカイブ化事業」におけるユビキタス・テクノロジーを活用した次世代アーカイブの構築に対してである。同賞の授賞式は昨年11月20日に東京大学山上海館にて同学会の全国大会の中で行われた。

◎同じく、大井奈美(西垣研・D2)の論文が情報文化学会賞を受賞し、表彰された。「オートポイエティック・システム論にもとづく俳句分析」と題された当該論文は、2009年『情報文化学会誌』16巻1号に掲載されている。

●大学院学位論文賞(修士論文・論文賞)

中野邦彦(田中秀幸研・D1)の論文「日本におけるeParticipationに関する考察」が2010年9月、日本社会情報学会(JASIS)の大学院学位論文賞を受賞した。本賞は学位取得が認定された修士論文ならびに博士論文の中で、社会情報に関する研究として優秀と認められた論文に対して表彰されるものである。

2011年3月19~20日 「MELL EXPO 2011」開催

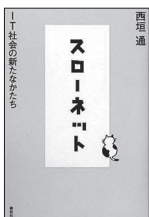
今年も開催いたします! 「メル・プラッツ」は、国内外からメディア表現やリテラシーに関する実践や研究が一堂に集結するイベント「MELL EXPO 2011」を2日間にわたりおこないます。テーマは「デジタルストーリーテリング、世界のメディアリテラシー情勢」等。

詳しくは下記Webページをご参照ください。(教授・水越伸)

■日程:2011年3月19~20日(土~日)

■会場:東京大学・弥生講堂一条ホール (http://www.mellplatz.net/)

Book



『スローネット—IT社会の新たなかたち』

西垣通 著 / 春秋社 2010年12月

半世紀近くITとつきあってきたが、どうにも腑に落ちないことがある。生活を豊かにし、幸福をもたらすはずのITやインターネットが、逆に人間を駆り立て、孤独にし、苦しめてはいないだろうか。ITの目的は効率向上だけではないはずだ。成熟した情報社会のために、スローITやスローネット・ライフを考えてみたい。

かにし、幸福をもたらすはずのITやインターネットが、逆に人間を駆り立て、孤独にし、苦しめてはいないだろうか。ITの目的は効率向上だけではないはずだ。成熟した情報社会のために、スローITやスローネット・ライフを考えてみたい。



『アーキテクチャとクラウド—情報による空間の変容』

池上高志、南後由和ほか著 / millegraph 2010年10月

人間をコントロールする情報環境のインフラ化が、地球規模でスピードに進行し、生活やコミュニケーションのあり方、内面の領域にまで深く影響を及ぼしつつあるなかで、建築・都市・空間はどう変容していくのか。従来の距離、境界、時間、公私などの概念はいかなる揺らぎをみせ、再構成されようとしているのか。建築家、複雑系研究者、社会学者、美術家などによる、対談・インタビュー・リサーチなどを6本収録。

編集後記

今年度心に残る出来事。学環10周年記念。現代韓国研究センターのスタート。香港へのゼミ旅行。今年度買った便利もの。アマゾン・キンドル。印象に残った調査。メディアの女性管理職のライフストーリー。『「ママさえ転動しなれば、楽しい家族団らんができたのに」と娘に泣かれたのがいちばん辛かった。』調査しながらいっしょに涙。あつと言う間の一年。来年度もニュースレターをよろしく願います。(林香里)

